

研究ノート

とうげんきょう
「灯幻郷・まつやま灯明ウォッチング」プログラム
実施報告：大学発・まちづくりイベントを通じた
地域資源の発見とネットワーク化の試み

甲 斐 朋 香
前 田 眞

目次

はじめに

1. 地域特性
2. 実施プログラムの内容
 - 1) 実施プログラムの概要
 - 2) 運営体制及び準備の経過
3. 分析—成果と課題

はじめに

本稿は、松山大学（愛媛県松山市文京町）において実施してきた大学発まちづくりイベント「灯幻郷・まつやま灯明ウォッチング」を通じた、大学と地域との連携による地域資源の発見とネットワーク化の試みに関するプログラムの実施報告書である。なお、本稿は、2005年度松山大学教育研究助成の成果の一部である。

1. 地域特性

愛媛県松山市は、2005年1月、北条市および中島町との合併により、四国唯一の50万都市となった。市内には、愛媛大学、松山大学、聖カタリナ大学、

東雲女子大・女子短大といった複数の大学があり、近年では、「GCM 庚申庵倶楽部」や「M スターターズ」など、学生による社会参画活動で注目を浴びるものもいくつか出てきた。行政の側でも、松山市が、2005年7月に、地域再生計画（「まちを知り、愛します松山」俺たちにできるまち再生計画～『大学生とNPOの融合』への仕掛け～）の内閣総理大臣認定を受けるなど、まちづくりの新たな担い手として、大学生への期待が高まりつつあるといえる。

松山大学は、創立80余年の歴史を持つ私立大学であり、現在、経済・経営・人文・法・薬の5学部6学科を擁している。大学が比較的小規模であることと、教員の研究棟が学部別に分かれていないことなどの要因により、学部間の壁は比較的薄い。

大学の近隣一帯は、愛媛大学、愛媛県立松山北高校、松山市立勝山中学校、同清水小学校（余裕教室は「生きがい交流センターしみず」として活用されている）など、教育機関が集中している。また、市役所や商業集積のある「大街道」までは自転車で15分程度と、まちなかにも非常に近接している。ただし、市中心部との間に「大街道」や「平和通」の大きな道路があり、また途中で城山を迂回しなければならないため、実際の距離よりも若干大きな心理的な隔たりが感じられる。

2. 実施プログラムの内容

1) 実施プログラムの概要

実施プログラムの概要は、以下のとおりである。

① 手作り灯明によるライトアップ

地域の子供たちから寄せられた絵をもとに、紙袋・砂・ロウソクでできた手作り灯明を並べ、大学のグラウンドに大きな地上絵を描く。

② 出店

地域福祉、地産地消、国際交流などのテーマを持った市民活動グループの

PR も兼ねて、出店を出す（有料）。

③ ライブパフォーマンス

ライブパフォーマンスを行う者に、発表の場を提供する。

プログラムの目的は、まちづくりイベントの企画・運営を通じ、参加者の企画力・コミュニケーション能力といった、まちづくりにとって重要なスキルの向上を図るとともに、地域資源の発掘力とネットワーク力を構築することにある。このため、イベントの企画・運営は、学内外から集まるボランティアを中心に行う。準備作業は、簡単で単純だが、多くの人手を要するため、世代差、職業等の社会的背景の差、障害の有無にかかわらず参加者が、ごく自然なかたちでふれあい、交流し、達成感を共有する機会となる。また、イベント自体は、まちをあかりでライトアップするという単純なものであるが、その単純さゆえアートや地域福祉、交通社会実験など、まちづくりに関わる様々なテーマを絡めやすいという利点もある。

同様のプログラムは、すでに、2002年度より、松山大学にて開催されてきたところである。当初は「(伊予銀行寄附講座)まちづくり学講座」のワークショップとして位置づけられていたが、開講期間が終了した2004年度からは、「松山大学教育研究助成」のプログラムとして実施している。

2) 運営体制及び準備の経過

イベントの実施体制は、前述のとおり、学内外のボランティア参加者による実行委員会方式を基本としている。中核となる学生スタッフ（他大学生も含む）の募集にあたっては、ゼミはもとより、講義や、学外での市民活動の場でも呼びかけを行った。このほか、HP や学内誌で得た情報をきっかけに自主参加を申し出てきた学生もいる。これに加えて、本番当日の会場設営及び撤収のみに参加する設営ボランティアも、学内外に呼びかけて集めている。PR の手段としては、地元マスコミによる報道や大学の広報もあるが、最も有効な手段

は口コミである。ふだんから各団体の主催する会合やイベントにも顔を出し、当該実施プログラムのPRや活動への協力、意見交換をする等、各団体間のネットワークを確立しておくことが重要である。

準備の経過は以下のとおりである。

① 先行事例「博多部灯明ウォッチング」の視察（10月）

例年、社会見学も兼ね、10月下旬、ゼミ生を中心に希望者を募り、先行事例でもある「博多部灯明ウォッチング」に参加している。大学からの補助要件に満たず、学生は自己負担での参加となったが、学生9名、OG1名が参加した。福岡市の市内見学も兼ねた計3日間の視察は、地域住民との交流、学年を越えた学生同士の交流の機会ともなった。

② 実行委員会（10月～2月）

10月下旬から本番まで、冬期休暇期間及び1月中旬の試験期間を除いて、ほぼ週1回のペースで実行委員会を行った。

学部も学年も異なる学生たちが集まるため、会議のはじめには簡単な自己紹介をさせたり、スナック類（なるべく出店協力者と関係があるもの、地産地消やフェアトレードなどの社会的テーマに関係があるもの）を用意したりといった工夫をし、面識のない者同士でも発言しやすい雰囲気づくりを心がけた。その際、イベントの趣旨や過去の例などについては、なるべく経験者の学生から説明をしてもらうとともに、簡単な議事録を学生スタッフにつくってもらう（のちにはブログを活用）といったかたちで、学生スタッフのコミュニケーション能力の向上に努めた。

しかし、実行委員会に毎回参加する学生の人数は非常に少なく、毎回の参加者数は10人弱にとどまった。このため、スタッフにはメーリングリストに加入してもらうとともに、ウェブ上に掲示板を設け、情報の共有や参加者相互の交流を図った。ただし、実際には、学生間で「互いの顔が見える関係」が確立されていない段階では、学生担当者が責任者に個別に連絡をとりつつ動くというケースが多く、こうしたITに関わる情報共有ツールについては環境を整備

したもの、その利用は活発であったとは言い難かった。基本的な土俵づくりとして、顔の見える関係（コミュニティ）づくりが基本であることが改めて認識された。

こうした状況の下、実施の場所と日時を確定し、準備のスケジュールと、各段階で必要な作業を割り出し、企画の内容を確定していった。2005年度は、例年使用していた松山大学文京キャンパスのグラウンドが、新学部設置に伴う校舎建設工事のために使いづらいということ、また、イベントも4年目を迎え、学外へ進出し地域社会とのコラボレーションも考えるべき時期に差しかかっているとの判断から、2005年12月23日(祝)に松山市味酒町の「若草幼稚園」にて学外での灯明プログラムを実施した。さらに、2006年2月5日(日)には、松山大学御幸キャンパスプールサイドにて、従来型の灯明プログラムを実施することとなった。

③ 学内外への参加・協力依頼

地上絵・出店・ライブパフォーマンスのそれぞれを実現するためには、協力者を探し、参加・協力を依頼しなければならない。このプロセスは、学生スタッフが地域内外の地域資源を発見し、交流を深めるためのきっかけとしても重要である。

実行委員会において、各部門での参加協力者候補をリストアップし、役割分担を決め、責任者は、必要に応じて、学生担当者と各団体との仲介を行うようにした。責任者は、協力者と学生が出会うまでのコーディネートや交渉に際しての助言といった中間支援的な役割になるべく徹し、一旦関係ができた後の各団体との連絡や交渉は、基本的に学生スタッフに任せるようにした。

灯明アートに関しては、地上絵のグラウンドに描く地上絵のデザインのもとになる絵を、地域の子供たちから募集し、アレンジをしてくれる人を探してデザインを依頼するというプロセスがある。原画については、例年通り、絵画教室の協力によって、幼稚園児から小学生の作品が寄せられた。原画募集に際しては、特に「子供」や「教育」といったテーマに関心を持つ学生たち（「教育」

や「子供」を研究テーマとする者や教職志望者など)を交渉係に割り当て、協力者と引き合わせることで、学生たちの調査研究ともリンクをさせた。このことにより、協力者と学生との関係を単なる事務的なやりとりだけに終わらせず、学生たちが協力者の活動の理念や内容に対する理解を深める機会を提供することができた。

原画募集のメ切後、2005年度は、学生スタッフを対象に、デザインを決めるためのワークショップを行った。このワークショップは、今回地上絵デザインを依頼した佐野勝久氏(アートNPO「QACOA」副理事長)の発案によるものである。参加者たちは、子供たちの原画の中から、地上絵で描きたいモチーフを複数ピックアップし、それらの共通点を見出す作業を通じて、「統一テーマ」を決定する。次に、そのテーマに沿って、モチーフをトレーシングペーパーとサインペンでなぞり描きしていく。その画像データをデザイナーがパソコンに取り込み、配置を考えて、地上絵のデザインを完成させた。従来は、単に担当スタッフがデザイナーに原画を渡し、デザインを依頼するというかたちをとっていた。ワークショップの開催は、デザインの決定についても学生スタッフの関与の度合いを深める(ことにより、学生スタッフのモチベーションも高まった)とともに、デザイナーと複数の学生スタッフとが交流する機会にもなった。

次に、資材の手配である。従来から、イベントの趣旨に鑑み、材料の購入は、なるべく地域内で行うこととしている。灯明のガワとなる紙袋は、地域のDIY店や大学生協を通じて入手し、布用染料(砥部焼作家を通じ、新居浜の藍染作家から購入)を用いて染める。重し代わりにの砂は、同窓会事務局を通じ、地元のDIY店より購入し、イベント前日、グラウンドに搬入してもらうよう手配する。ロウソクは、地元商店街の紹介を通じ、市内の雑貨店より購入する。これらの作業工程は、協力者と学生との交流の発展には至らなかったが、学生スタッフについては、ごく初歩的なビジネスマナーや、事務処理能力、交渉力といったスキルの習得につながるものと思われる。

2005年度は、地上絵のほか、大学に近接する「生きがい交流センターしみず」のデイケアサービス利用者などの参加により、一枚一枚の灯明のガワを絵や文字でデコレーションする「お絵かき灯明」の展示コーナーも設けた。「しみず」は、小学校の空き教室を利用してできた地域交流拠点施設としては四国唯一の施設であり、松山市が松山市社会福祉協議会に委託し、運営をしている。この「しみず」が実施しているデイケアサービスの一環として行われている「絵手紙教室」に学生が出向き、イベントの趣旨を説明するとともに、協力を依頼したところ、約200枚の「お絵かき灯明」が集まった。これをきっかけに、イベント当日、初めて、あるいは久しぶりに大学に足を踏み入れたという地域住民も多く、地域と大学とがつながるひとつのきっかけとなったといえる。

出店については、地産地消・国際交流・地域福祉・アートなど、まちづくりに広く関わるテーマを持つ市民グループを中心に参加者を探し、協力をよびかけた。その結果、地域文化振興を行うNPO法人「GCM 庚申庵倶楽部」の学生メンバーや、NPO法人「アジア・フィルム・ネットワーク」主催の「いっぺんさん市」にも出店している主婦のグループなどの参加協力を得た。また、ライブパフォーマンスについては、学生タップダンサーのほか、若草幼稚園の流水達也園長率いる「流水バンド」、韓国の伝統的な打楽器を演奏する音楽サークル「チャンゴヨロガヂ」の参加協力を得ることができた。ただし、出店やライブパフォーマンスの参加者は、自らの活動でほぼ手一杯な状態であり、学生スタッフとの交流の発展という面では課題も残った。

3. 分析—成果と課題

以下では、プログラムの成果について、教育的効果の側面と、地域社会へのインパクトの側面に分けて述べる。

前者については、参加した学生のコミュニケーション・スキル向上や、地域・まちづくり・市民活動への関心の高まりといった点が挙げられる。事後の

聞き取りによると、学外参加者の満足度はおおむね高く、会場設営ボランティアの「リピーター」も出てきているが、その理由のひとつには、異世代間交流、とりわけ学生スタッフとの交流が挙げられる。学生スタッフに対しては、熱意や気配りの点で高い評価が寄せられており、参加者のコミュニケーション・スキルの向上という点については、一定程度の成果を挙げることができたように思われる。また、参加者自身が得た活動の達成感もリピーターの大きな理由である。

一方、学生参加者からも、「達成感を感じることができた」「さまざまな立場、さまざまな分野でまちづくりに関わる社会人たちとの出会いに感銘を受けた」といった感想が寄せられた。数は決して多くはないものの、学生たちの中には、その後も、イベントを通じて知り合った市民活動グループとかかわりを持ちながら、あるいは、自らグループを組織して、持続的に社会参画を行うものも出てきている。

また、後者についても、地道に活動を続けてきたことによる成果が、徐々に見られるようになってきたように思われる。殊に、行政や精神保健福祉の関係者からは、比較的容易に達成感を味わえ、様々な人と人とが交わる機会となる点などが、着目されるようになってきた。石井東地区の自治会や「託老所あんき」のように、ノウハウを学び、コミュニティづくりに向けた自らの活動の一環として実施する例も出てきたり、住民主体のまちづくりや市民活動の促進などといった観点から、イベントの実施体験をテーマに、講演や原稿執筆の依頼が毎年数件寄せられるようになってきたりしていることも、そうした関心のあらわれといえよう。

その一方で、イベントの最終目標である地域のまちづくりネットワークの確立・強化に関しては、克服すべき課題も残る。

第一に、同プログラムを通じて形成されつつあるネットワークは、現在、どちらかといえば特定の人物を中心とした放射線状に近いかたちをしている。参加者同士のヨコの連携を強め、これを網目状のものに近づけていくことが重要

であろう。

第二に、現在は季節限定型ともいふべきかたちの参加者間のネットワークが、より恒常的に機能し得るような仕掛けが必要であるものと思われる。学生も、また市民団体の側も、自らの活動で精一杯であり、その必要性は感じつつも、他の団体の活動にまで目を向け、参加するだけの余裕がなかなかない。理想としては、このプログラムが、市民活動参画への「入口」や、各団体間のミッションに対する相乗効果を発揮するためのマッチングに向けたコミュニケーションの場となる等、活動の発展の糸口としての機能を果たすようになることが望ましい。

第三に、現在のネットワークは、いわば「志縁」偏重ともいふべきかたちとなっている。すなわち、参加者の層が、以前から市民活動やまちづくりに関する理解や問題関心を一定程度共有している人々にやや限定されている。現在でも、「しみず」とのつながりを通じて、地域住民と学生との交流が局地的には始まっている段階ではあるが、今後は、この灯明プログラムを活用することによって、協働事業による地域の課題解決の基本となるコミュニティづくりにつながるという点を明確にしつつ、地域全体に対してより幅広く働きかけ、時間をかけて「志縁」と「地縁」のバランスがとれた人的ネットワークを構築していくことが重要であろう。

また、現在は、大学主体の企画に地域を巻き込むかたちとなっている。イベント本来の趣旨からすれば、将来的には、大学側が側面支援を行い、地域主体の企画の誘発をもたらすようなあり方へのシフトも考慮に入れ、プログラムを構築する必要があるだろう。

現在の厳しい財政事情に鑑み、地域社会を支えるシステムの中で行政が果たす役割は今後も縮小傾向となることが考えられる中で、日常生活における互いの「支え合い」の基盤となるコミュニティ活動の重要性は高まりつつある。今後は、そういった見地から、コミュニティづくりにとっての灯明プログラムの有効性を積極的に啓発していくことも求められよう。単年度のプログラムとし

ては難しいかもしれないが、最終的には、地域における灯明プログラムに対する自発的な思いを誘発するとともに、たとえば資金調達のための方策から参加者とともを考えていくという中間支援型のやり方も、視野に入れるべきかもしれない。参加者たちが自ら企画書を作成し、助成金や寄付金を獲得できるだけの力をもつようになることは、プログラムの趣旨からすれば、到達すべき目標のひとつといえる。